第六八回　東洋文化講座（二〇〇八年六月二七日）

文字文化からみた草原とオアシスの世界

松井　太

はじめに

「草原とオアシスの世界」とは、内陸アジアまたは中央ユーラシアと称される、ユーラシア大陸の内陸部分に相当する。ユーラシア大陸の内陸部は、東は大興安嶺、西はカルパティア山脈、北はタイガ森林、南はヒマラヤ・ヒンドゥークシュの両山脈によっておおまかに区切ることができ、これらの山地や森林地帯によって海洋からの湿気が遮られた乾燥地帯として特徴づけることができる。この乾燥地帯は、世界の屋根と呼ばれるパミール高原から東北へ張り出す天山山脈と西方アラル海へ注ぐシル河をそれぞれ延長させたラインにより、大まかに南北に分割することができる。北側には一望千里のステップ草原が広がる騎馬遊牧民の世界が、南側には強烈な乾燥砂漠の中に点在する緑水豊かなオアシス都市に暮らす農耕民・商業民の世界が広がる。

文字文化を具現する文字記録すなわち文献資料に着目してこの「草原とオアシスの世界」をみた場合、北の草原世界にはきわめて限られた点数の文献資料しか遺存していない。スキタイ・匈奴・鮮卑・柔然・突厥・ウイグル・キタイ（契丹）・モンゴルなど、歴史上草原地帯に興亡した遊牧民の多くは、「本来は自前の文字を持っていなかった」と伝えられている。前近代世界において、文字記録の多くは支配者が支配の正統性を示すためのものであった。草原世界の騎馬遊牧民が自ら残した文字記録がそれほど多くないのは、彼らが前近代世界最強の軍事集団であったこと――その支配の正統性をあえて示す必要がないほどに――とも無縁ではないだろう。

これに対して、南のオアシス世界は、東方の中華文化（漢文化）圏・インド文化圏・オリエント文化圏におこっ

タリム盆地を中心とする中央アジア地図

た大帝国と接触しあるいはその支配を被った結果、早くから文字文化が流入することとなった。その古代における状況を示すのが、中央アジア地域、とくに天山山脈と崑崙山脈に囲まれたタリム盆地地域を中心とする現在の中国新疆ウイグル自治区の各地の遺跡から出土した古文献資料群である。後述するように、この地域では、一〇世紀以降にトルコ系ウイグル遊牧民の支配下で住民のトルコ語化が進んで「トルキスタン（トルコ人の住地）」と呼ばれるようになり、さらには一六世紀以降にはもっぱらアラビア文字を用いるイスラーム文化に覆われることとなった。しかし、一九世紀末から二〇世紀初頭、西欧列強や日本などの調査により発掘・将来された多数の古代語文献資料は、イスラーム化以前の当地における文化の多様性を明らかにした。実際にその発掘に従事したドイツの考古学者ル＝コック(A. von Le Coq) は、これらの出土古代文献が一七種類の言語、二四種類の文字で書かれるという。[1] この分類は、その後の研究により若干の訂正を加えねばならないが、それでも各々二〇種類前後の言語・文字が用いられたことは確実である。

主な言語としては、漢語・トルコ語以外に、サンスクリット語・アグニ語（トカラ語A）・クチャ語（トカラ語B）・ガンダーラ語などのインド系諸語、中世ペルシア語・バクトリア語・パルティア語・ソグド語・コータン（ホータン）語などのイラン系諸語、さらにモンゴル語、西夏語、チベ

表1　イスラーム化以前の中央アジアにおける言語と文字

文字＼言語	ギリシア語	ヘブライ語	シリア語	ソグド語	パルティア語	中世ペルシア語	近世ペルシア語	バクトリア語	コータン語	トゥムシュク語	サンスクリット語	ガンダーラ語	アグニ語（トカラ語A）	クチャ語（トカラ語B）	古代トルコ語	モンゴル語	漢語	西夏語	チベット語
ヘブライ文字		■					■												
マニ文字				■	■	■	■							■	■				
ソグド文字				■	■	■									■		■		
ウイグル文字															■		■		■
突厥文字					■	■									■				
シリア文字			■	■			■								■				
パフレヴィー文字						■									■				
アラビア文字							■								■				
チベット文字															■		■		■
パクパ文字															■	■			
ギリシア文字	■																		
エフタル文字								■											
ブラーフミー文字				■					■	■	■	■	■	■	■	■			
カローシュティー文字												■							
漢字																	■		
西夏文字																		■	

Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften, *Turfanforschung*, Berlin 2002, p. 9を一部修正して作成

ット語、シリア語などが挙げられる。これらの言語を記す文字としては、漢字の他に、ヘブライ文字、マニ文字、ソグド文字、ウイグル文字、突厥文字、シリア文字、パフレヴィー文字、アラビア文字、チベット文字、パクパ（パスパ、八思巴）文字、ギリシア文字、ブラーフミー文字、カローシュティー文字、西夏文字などがある。また一つの言語が複数の文字で表記され、逆に一つの文字が複数の言語の表記に用いられることも多い（表1参照）。その組み合わせをみただけでも、イスラーム文化によって均質化される以前の中央アジアが、多様な言語文化・文字文化のるつぼであったことが理解されるであろう。

本講は、これらの中央アジア出土の諸文字・諸言語文献を主要な材料として、（一）中央アジアへの仏教浸透と文字文化との関係、（二）東西交易の主役であったソグド人の文字文化、（三）ソグド人と密接に関係する突厥・ウイグルなど古代トルコ遊牧民の文字文化、（四）ウイグル遊牧民の用いるトルコ語＝ウイグ

ル語がオアシス世界に広まる過程、（五）モンゴル世界帝国とウイグル文字文化との関係、について概説するものである。

一　仏教の中央アジア伝来とインド系諸語文献

中央アジア出土古代語文献のうち、時代的に最も古層に属するのが、インドからの仏教伝来に伴って生まれたインド系諸語文献であり、カローシュティー文字文献・ブラーフミー文字文献に二大別できる。

カローシュティー文字はアラム文字を改良してつくられた北西インド土着の文字であり、この文字で表記される文献資料は紀元前三世紀〜紀元後四世紀に属し、西北インドで話されていた中期インド語の方言であるガンダーラ語（西北プラークリット語）を表記している。タリム盆地地域出土の資料としては、コータン（于闐）出土の漢字・カローシュティー文字の双方の銘文のある「シノ＝カローシュティー銭」や、ニヤ・楼蘭・エンデレなどタリム盆地南縁の諸遺跡から出土した木簡類（三〜四世紀）が知られている。特に後者の木簡類は、オアシス都市国家である楼蘭（鄯善）王国の社会状況を歴史学的に考察する上で貴重な資料である。[2] しかし五世紀以降には、カローシュティー文字はインドを含む諸地域でもほとんど使用されなくなり、ブラーフミー文字にとってかわられることとなる。

ブラーフミー文字は北方セム系文字に起源するという説が有力だが、インダス文字起源説やアーリア人独創説もあり、定説となるには至っていない。いずれにせよ、紀元前三世紀頃にはインド亜大陸のほぼ全域で用いられ、さらに仏教文化の拡大に伴って東南アジアにも広まり、チベット文字の母体ともなった。そして、仏教が中央アジアに北伝・東伝するにつれ、ブラーフミー文字も中央アジア・タリム盆地地域で使用されることになる。ここではまず、クチャ（亀茲）を中心に、カラシャール（アグニ、焉耆）・高昌・トゥルファン（吐魯番）など、タリム盆地北縁の諸オアシス都市におけるブラーフミー文字の導入・発展、ならびにその仏教文化との関わりをみていきたい。

紀元前一世紀頃のタリム盆地の諸オアシス都市の情況を伝える『漢書』西域伝によれば、クチャは一〇万を超える人口を擁する中央アジア最大のオアシス都市国家であった。ドイツ探検隊が将来した中央アジア出土のブラーフミー文字文献の約六割がクチャから出土していることも、クチャが中央アジアの文化的中心であったことを物語る。これらのブラーフミー文字は、さながら漢字が時代を追って篆書・隷書・楷書・行書と変化していくように、書体の特徴によって記された時代を大まかに判定することができる。これに従って中央アジア出土ブラーフミー文献の年代を分類していくと、古層（二世紀〜五世紀）に属すると判断されるものは、ほとんどがクチャから出土している。すなわち、

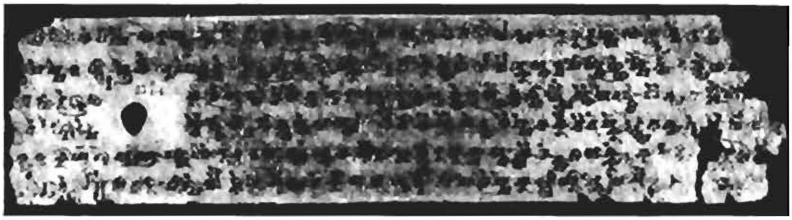

図1　クチャ語訳『ウダーナヴァルガ』写本

仏教がインドからガンダーラを経て中央アジア・タリム盆地に進出するにあたり、まずはクチャに布教の拠点が置かれたことが判明する。

さらに、中央アジア出土ブラーフミー文献の言語・内容および書写材料には、時代ごとに特徴的な相違がみられる。最古層（二〜三世紀）の写本は、ほとんど全てがインド産の貝葉に書かれ、内容はサンスクリット語のアビダルマ論書や仏教戯曲・医学書などである。逆に、ブッダの教えである経や、戒律を記したものが無い。すなわち、この時点では、経や律を暗記してすべて頭に入れていたインド出身の僧が、クチャでの布教に必要な諸種の写本をインドから持ち込んでいたことになる。

三〜五世紀になると、戒本や陀羅尼（呪文）経典、さらにはサンスクリット語の文法書も登場する。そもそも、クチャ人自身の言語は、同じインド系でもクチャ語（トカラ語B）であった。クチャに仏教信仰が浸透した結果、クチャ人が仏教に帰依して戒律を学び、陀羅尼などの仏教経典を読誦するためにサンスクリット語の習得に努めるようになったことがうかがえる。このことは、クチャ近郊のスバシ遺跡から出土した『ウダーナヴァルガ（*Udānavarga*）』という仏教詩集のサンスクリット語写本からも傍証される。この写本は四世紀頃に属するが、インド産貝葉ではなくクチャ現地で調達されたポプラ板に筆写されている。やはり、クチャ人のあいだにサンスクリット語＝仏教の知識が普及していたことを示すといえる。

五世紀を過ぎると、クチャ語表記のための特殊な加点や文字が考案されるなど、クチャで使用されるブラーフミー文字自体がインド本地の書体から大きく異なるようになる。また、中国から流入した紙が書写材料の大部分を占めるようになり、もはやインド産の貝葉は使用されなくなる。これは、クチャの仏教教団が本場のインドから離れ、中央アジアにおいて一定の独立性・独自性を発揮するようになったことを反映している。さらに七世紀を過ぎると、『ウダーナヴァルガ』のクチャ語訳本（図1）やサンスクリット語・トカラ語（クチャ語またはアグニ語）の対訳本、さらにはトカラ語独自の仏教讃歌などが、クチャ・カラシャールなどタリム盆地北縁の広域で作成された。これらの地域に、インドとは異なる独自の仏教文化が発展・確立したこ

図2　漢語・コータン語対訳のラクダ売買契約証文

漢文の行間や，左上の余白部分にブラーフミー文字コータン語の対訳文が記される。関係者は全てコータン人らしい。H. Kumamoto, Sino-Hvatanica Peterburgensia : Part II, In : *Iranian Languages and Texts from Iran and Turan*, Wiesbaden, 2007, pp. 147-160 参照

とがうかがえる。[3]

玄奘三蔵がインドへの求法の途上、クチャを訪問したのはちょうどこの頃である。玄奘の伝記（『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』）によれば、クチャの高僧モークシャグプタ（木叉毱多）は玄奘に「クチャには雑心・倶舎・毘婆沙などの諸論典が全て揃っており、わざわざ苦労してインドへ行く必要はない」と告げたという。ここにも、クチャの仏教教団の独自性をみてとることができるだろう。

なおブラーフミー文字は、タリム盆地南縁の諸オアシスでも、カローシュティー文字にかわって使用されるようになった。この地域では、サンスクリット語以外に、イラン系に属するコータン語の話者も、ブラーフミー文字を使用して仏典や文学作品さらには世俗的な文書類を作成した。クチャ語に使用されたブラーフミー文字と同様に、コータン語に使用されたブラーフミー文字も、インド本来の書体とは独自の変形・発展をこうむった。

七世紀中葉から八世紀末まで、クチャ・コータンなどタリム盆地の各オアシス都市国家は、あるいは直接的に、あるいは間接的に、東方の唐王朝の支配下に組み込まれることとなる。唐王朝は各地域に軍隊を駐屯させ、漢語を用いる軍政機構を設けた。しかしながら、図2に示したような漢語とコータン語の二言語文書群は、中央アジアの原住民が唐王朝の支配下にあっても独自の言語文化を保持していたことを示している。

二　ソグド人の活動とその文字文化

タリム盆地からパミール高原をはさんでその西方、アム河中上流域のサマルカンド・ブハラ・カブダーン・クシャーニヤなどの諸オアシス都市は、イラン系のソグド語を母語とするソグド人たちの故地でありソグディアナと総称される。彼らが、ソグディアナを本拠として、東は中国地域から西はビザンツ帝国に至るまでのユーラシア内陸部に点在する諸オアシス都市を結ぶ商業ルートを作り上げ、さらには北方の草原地帯の遊牧勢力ともタイアップして、前近代ユーラシア広域に商業ネットワークを展開したことはよく知られている。

図3　ソグド語「古代書簡」第二書簡

ソグド人は古くはペルシア帝国の影響下にあってその国教だったゾロアスター教を多く信仰し、やはりアケメネス朝で用いられていたアラム文字からソグド文字を考案して自らの言語を表記した。またマニ教（ペルシア起源の二元論的宗教）の教徒はマニ文字、キリスト教徒はシリア文字を用いることもあった。

ソグド人が残したソグド文字ソグド語文献で最も重要なのは、中国国内の観光都市として名高い敦煌の西方の烽火台から発見された「古代書簡（Sogdian Ancient Letters）」であろう。これは五通のほぼ完全な書簡からなり、西暦三一一～三一四年頃に書かれたと考えられている。五通のうち、甘粛地方の東部からサマルカンドに宛てられた第二書簡（図3）が、ソグド人の商業ネットワークの広がりを示すものとして有名である。これによれば、差出人のナナイヴァンダクは、甘粛地方の東部に商業拠点を置き、東方の中国本土に仲間や使用人を派遣して交易にあたらせていた。彼らの活動情況を、匈奴などの遊牧民の侵入で大混乱する当時の中国情勢とともに本国サマルカンドの商売仲間へ報告し、さらにナナイヴァンダクが本国に残してきた資産を自分の息子のためにうまく運用してくれるよう依頼するのが、この第二書簡の内容である。敦煌からおそらく楼蘭へ宛てられた第一・第三書簡、涼州から発信された第五書簡とあわせみると、四世紀はじめの時点でソグド人たちは中国内部にまで商業コロニーを構成し、銀貨や銅貨で金・コ

ショウ・ジャコウ・絹織物などの商品を、中国とソグディアナをまたにかけて売買していたことがうかがえる。「古代書簡」以外にも、ソグド人の故地ソグディアナや、高昌・トゥルファン・クチャ・コータン・楼蘭などタリム盆地、さらには敦煌や西安（すなわち隋・唐など歴代王朝の都となった長安）といった中国内地からも、ソグド文字ソグド語文献が発見されている。図4のソグド語契約証文は高昌近郊の墓地から発見されたものであり、西暦六三九年に、サマルカンド出身のソグド人が、漢人の植民国家である高昌国でソグド人女奴隷を漢人仏僧に売り渡すというものである。女奴隷はササン朝ペルシアの銀貨で取引され、売買にはサマルカンド・クシャーニヤ・マーイムルグなどのソグディアナの諸都市から高昌を訪れていたソグド人が証人

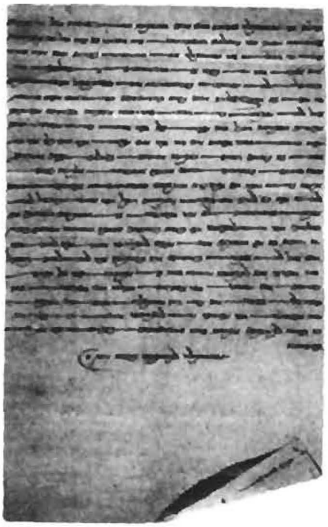

図4　ソグド語女奴隷売買契約証文

図5　西安近郊ソグド人墓の漢語・ソグド語二言語墓誌

中央から左側には漢文，右側にはソグド文（左行から右行への縦書き）が記される。被葬者のウィルカクの祖父の代に中国に移住してきたという。Y. Yoshida, Sogdian Version of the New Xi'an Inscription. In : *Les Sogdiens en Chine*, Paris, 2005, pp. 57–72 参照

として立ち会い、高昌国で書記官となっていたパトールという名のソグド人が認可を与えている。このように、ソグディアナ本土から続々と高昌を訪れて商業に従事し、さらには高昌に土着して新来の同族の交易活動の便宜を図るソグド人の姿は、高昌国時代そして七世紀以降の唐王朝支配時代の諸種の漢語文書からも確認することができる。また、近年西安近郊で発掘されたソグド人墓からは、漢語・ソグド語の二言語の墓誌が見つかった（図5）。これは五七九年に八十六歳で死去したウィルカクというソグド人とその妻を追悼するものである。漢語とソグド語では墓誌銘の内容に若干の差があり、また棺を収めた石槨の壁面の浮彫（図6）にはゾロアスター教に関係するモチーフがみえることからも、中国に移住してきたソグド人が依然として独自の西方的文化を保っていたことを示す。

図6　西安近郊ソグド人墓の石槨
故人がラクダに乗ってチンワト橋（ゾロアスター教における天国への架け橋）を渡る様子が描かれる

ところで、古来、オアシス都市の商業民と草原地帯の遊牧国家は密接な提携関係を構築していた。遊牧国家は騎馬軍団の軍事力に依拠してオアシス諸都市を支配下におきつつ、商業民の遠距離交易活動を保護した。商業民の側も、遊牧勢力の庇護下で草原地帯・砂漠地帯でのスピーディかつ安全な移動が保障され、その代償に、奢侈品や手工業品・食糧など、遊牧世界では入手できない様々な物資を遊牧民にもたらし、商業利潤を還元した。また、経済に明るい商業民は、遊牧国家にとって、国内における徴税・財政政策や、対外的な交渉を決定する上でのアドバイザーとしての役割を果たした。

この点で、ソグド人にとっても、中央アジアのエフタル遊牧国家（五世紀中葉～六世紀中葉）や、モンゴル高原のトルコ系遊牧国家すなわち突厥帝国（六世紀中葉～八世紀中葉）およびウイグル帝国（八世紀中葉～九世紀中葉）との関係がきわめて重要であった。特に突厥帝国は、アルタイ山脈から興起して東はモンゴル高原、西はカザフ草原に至る広大な領域を支配したが、その国内には多数のソグド人が入り込んでいた。彼らは突厥のために中国やペルシア・ビザンツ帝国などとの外交的・経済的交渉において大きな役割を果たし、突厥国内ではソグド文字ソグド語が公用語としての役割を果たすようになった。

モンゴル国に現存するブグト碑文（図7）、および新疆ウイグル自治区昭蘇県に遺る小洪那海石人銘文（図8）は、このことを雄弁に物語る。ブグト碑文は、仏教的内容に関するブラーフミー文字銘文（未解読）を碑石に刻し、その建立の経緯を側面・裏面にソグド文字ソグド語で記したものである。ソグド語銘文の内容からは、この碑石の建立は突厥の第四代可汗（君主）の佗鉢（位五七二～五八一）の死後まもない――おそらくは佗鉢可汗死後、可汗位をめぐる内乱から東突厥・西突厥への分裂（五八三）に至る――時期であること、また菴羅可汗をはじめとする佗鉢可汗の子孫たちが自らの即位の正統性を主張することを意図していたこと、がうかがえる。一方、小洪那海石人銘文は、突厥の泥利可汗をモデルとした石人像の腰から下の部分に、約二〇行のソグド語銘文を刻したものである。その内容は、やはり佗鉢可汗没後の突厥国内の内乱によりモンゴル高原から天山方面へ逃れた阿波可汗（菴羅可汗の従兄弟）の死（五九九）後、その甥の處羅可汗らが、やはり突厥の支配者としての自らの正統性を主張するものである。いずれも、突厥の可汗一族が、自身の主張を文字言語化するにあたってソグド語を用いていること自体、ソグド文字ソグド語文化の突厥に対する影響力の大きさを示すものである。

さらにごく最近、トゥルファン近郊の巴達木遺跡で発見されたソグド語文書断片（図9）も注目に値する。この文

図7　ブグト碑文

図8　小洪那海石人

図9　巴達木遺跡出土の唐代ソグド語公文書断片

書には「金満州都督府之印」という漢字の朱官印が捺されており、また金満州都督府とは唐代に天山山脈の北麓（現在の新疆ウイグル自治区の区都ウルムチの付近）おかれた軍政機関であるから、このソグド語文書は明らかに唐代の公文書である。ソグド文の内容から、本文書は、唐の龍朔二／三年（六六二／三）前後に天山北麓に避難してきた、トルコ系のカルルク遊牧民のへの対応に関係して、金満州都督府から西州都督府（トゥルファン盆地）に送達されたことが判明する。なお、金満州都督府の歴代長官も、やはりトルコ系遊牧民の沙陀族から任命されていた。つまり本文書は、唐の支配下に組み込まれていたトルコ系遊牧民——あるいはその配下にあったソグド人官僚——がソグド語で行政文書を作成しており、またそれが正式な公文書として唐王朝の西州都督府でも受領・処理されていたことを示す。換言すれば、ソグド文字ソグド語は、唐王朝の官庁・行政機関にも——特にトルコ系遊牧民と関係する局面では——公用語とされていたのである。[3] 当時のユーラシア東方地域におけるソグド人とその文字文化の重要性を再認識させるに十分であろう。

三　突厥・ウイグル遊牧帝国の文字文化

六世紀中葉以来、モンゴル高原で強制を誇った突厥も、東西分裂以降は弱体化し、東突厥は六三〇年に唐王朝によって滅ぼされ、モンゴル高原のトルコ系遊牧民は唐の羈縻支配下におかれる。しかしおよそ半世紀後の六八二年、クトルグという突厥の旧王族が唐に叛旗を翻し、突厥帝国を復興させた。史上にこれを突厥第二帝国（第二突厥）という。

突厥第二帝国は草原世界の騎馬遊牧民の歴史に大きな画期をもたらした。いわゆる突厥文字（古代トルコ文字、トルコ＝ルーン文字とも呼ばれる）を考案し、それによって遊牧民自らの言語——この場合は古代トルコ語——で歴史記録を残したのである。

突厥第二帝国時代の突厥文字資料としては、クトルグとともに突厥復興に尽力した名将トニュククが自ら撰述した「トニュクク碑文」（七一六頃撰述、七二五頃建立）や、クトルグの二人の息子ビルゲ可汗・キョル＝テギンの追悼のために建立された「ビルゲ可汗碑文」（七三五建立）・「キョル＝テギン碑文」（七三二建立、図10）が最も重要であ

図10　キョル＝テギン碑文突厥文字面拓本

り、その他にはある突厥王族のために建立されたオンギ碑文や、それに次ぐ突厥貴族のためのキュリ＝チョル碑文などがある。いずれも故人を追悼しその事績を記すものである。このうちキョル＝テギン碑文には、当時の唐皇帝玄宗が突厥との和好を願って製した漢語の追悼文が合璧されている。しかし突厥文字古代トルコ語面には、キョル＝テギンの兄ビルゲ可汗の言葉として、東突厥の滅亡の歴史的経緯を思い起こさせつつ突厥人の「ナショナリズム」を鼓舞し、唐と必要以上に親交・接触することを戒める内容がある。[6] 一つの碑石の表裏に同時に記される突厥・唐の思惑の違いは、突厥文字創製以前の遊牧国家の歴史を漢文史料に主拠して再構成しようとする際、それと知らずに中国王朝の視点・論理に絡め取られている危険性を、あらためて痛感させる。

なお、突厥文字がいつ・どのようにして考案されたかについては、未だに不明の点が多い。前節に述べたような突厥とソグド人との密接な文化的交流に鑑みて、突厥文字の起源をソグド文字に求める見解がかつては有力であったが、現実には両者の各文字の形態は大きく異なっているため近年では受け入れられていない。

この突厥第二帝国は八世紀中葉に滅亡し、これにかわって同じくトルコ系のウイグル遊牧帝国がモンゴル高原に成立する。しかし、突厥文字はそのままウイグル帝国下でも古代トルコ語を表記するために用いられた。ウイグルの第二代可汗の紀功碑であるシネウス・タリアトの両碑文や、ウイグル帝国成立時の事績を伝えるテス碑文などがウイグル帝国時代の突厥文字碑文としてあげられる。また、イェニセイ河流域からも、突厥・ウイグルに敵対していたトルコ系キルギズ遊牧民の手になる突厥文字碑文が多数発見されており、[7] 七～一〇世紀に黒海北岸に成立したトルコ系ハザール遊牧国家でも突厥文字が使用されていた徴証がある。さらに近年、シベリアやカザフスタンでも草原地域の諸遺跡から突厥文字の銘文資料が収集され始めており、今後の分析が期待される。[8]

ウイグル帝国について、前述のシネウス碑文は「ソグド人・漢人のためにセレンゲ河畔にバイ＝バリクを建設した」という。バイ＝バリクとは古代トルコ語で「富の都城」の意であり、これは唐代の漢文史料でも「富貴城」と呼ばれ、現在でもモンゴル国にその遺跡が残っている。ウイグル帝国は、ソグド人・漢人などの商業民の交易活動をさらに振興させるべく、あえて草原のなかに商業拠点としての城郭都市を建造したのである。唐王朝の屋台骨を揺るがした安史の乱（七五五～七六三）の鎮圧を援助し、唐王朝に対して外交的優位にたったウイグルは、ソグド商人と結託してその優位を最大限に利用し、絹馬交易によって貨幣としての絹を大量に獲得した。また、第三代可汗の牟羽可汗（位七五九～七七九）は、多くのソグド人が信仰していたマニ教に改宗し、ササン朝に迫害されて中央アジア地域に逃れ

ていたマニ教教団に国家的な保護を与えた。以上の点からみて、ウイグル帝国は突厥を上回る水準でソグド人との文化的・経済的関係を構築したといえる。バイバリクとは別にモンゴル高原に建設された首都オルドバリク（現在のカラ＝バルガスン遺跡）に、ウイグル帝国のマニ教信仰を称賛する目的で建立された碑文（いわゆるカラ＝バルガスン碑文、図11）は、突厥文字古代トルコ語・ソグド文字ソグド語・漢文の三言語で記されており、ソグド文字ソグド語がウイグル帝国においても公用語の扱いを受けていたことがうかがえる。

図11　カラ＝バルガスン碑文の碑頭の部分の断片

このようにソグド文字文化との関係を深めるなかで、ウイグル人たちは、自分たちの言語である古代トルコ語を表記するに際して、突厥文字のほかにソグド文字をも用いることも試みていたと推測される。次節にみるように、ソグド文字が「ウイグル文字」となっていく土壌は、この頃に徐々に形成されていったのであろう。

四　西ウイグル王国の成立と「トルキスタン化」

唐王朝を圧倒して東方ユーラシアの覇者となったウイグル帝国も、八四〇年前後、相次ぐ天災と内乱によって瓦解し、ウイグル遊牧民はいくつかの集団に分かれてモンゴル高原から各地へ逃れていく。そのうちの多くの集団は西方へ逃れ、天山山脈東部の草原地帯に新たに拠点を置き、そこから天山南麓・タリム盆地北縁のオアシス都市に支配者として臨むことになった。唐王朝は安史の乱以降の弱体化の結果、八世紀末、タリム盆地の支配を放棄しており、それ以降当地はすでにウイグルの勢力下に入っていた。この

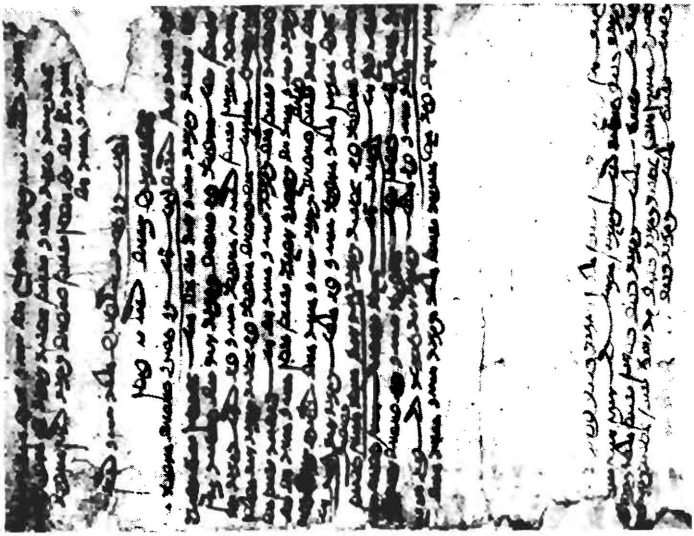

図 12　敦煌出土のソグド語商業文書
左から 16-17 行目，19-20 行目にウイグル語が交じる

ようにして九世紀後半に東部天山・タリム盆地に成立したウイグル亡命王国を、西ウイグル王国（または天山ウイグル王国）と称する。

さて、新たにタリム盆地の諸オアシス地帯を直接支配することとなったウイグル遊牧民は、この段階ではその多くが依然としてマニ教徒であった。一方、支配下の諸オアシスでは、第一節にみたように、仏教を信仰する漢人やインド系・イラン系の住民が多数を占めていた。すなわち、支配層と被支配層の間では、生業（遊牧—農業・商業）、宗教（マニ教—仏教）、文字言語（古代トルコ語＝ウイグル語—漢語・インド系・イラン系諸語）という、文化的な対立軸がたちあらわれたのである。

まず文字文化・言語文化についてみれば、ウイグル人たちは、西方移住後もしばらくは突厥文字を使用していたが、まもなく完全にソグド文字を受け入れるようになった。ただしソグド文字によるウイグル語表記法が確立するまでは、彼らはソグド語を自分たちの文章語として用いたらしい。トゥルファンや敦煌から出土した一〇世紀頃のソグド語文献には、一部にトルコ語＝ウイグル語が交じったもの（図12）や、ウイグル語の名前を持つ者がソグド語で書いた祈願文などが散見する。これらは、本来ウイグル語を母語とする者がソグド語を文章語として利用したものと推測される。しかし、その後まもなくウイグル語の表記法が確立すると、政治的な支配者の言語であるウイグル語がソグド語

よりも優勢となり、逆にソグド語話者の方がウイグル語を使用するようになった。これがすなわちソグド人の「ウイグル化＝トルコ化」であり、ソグド文字の「ウイグル文字」化である。

一方、宗教面についてみると、タリム盆地の諸仏教教団は、マニ教のさまざまな宗教用語やマニ教経典の種々の形態的特徴を採り入れつつトルコ語＝ウイグル語の仏教経典を生み出し、マニ教徒のウイグル支配層に対して熱心に改宗を働きかけた。これが功を奏し、一〇世紀になるとウイグル支配層にも徐々に仏教が浸透した。[9]

この改宗工作の最初期に大きな役割を果たしたのはトカラ人（ここではクチャ語・アグニ語話者の総称として用いる）であった。表2に示したように、サンスクリット語とウイグル語では、同じ仏教用語でも語末の音の形式が若干異なる。この現象は、サンスクリット語がそのままウイグル語に借用されたのではなく、一端トカラ語（クチャ語・アグニ語）を経由したとみなすことで説明され、換言すればウイグル人たちがトカラ人仏教教団から仏教用語を学んだことを示している。また、古い時代のウイグル仏教文献には、輪廻を一般的な六道（天道・人間道・畜生道・地獄道・餓鬼道・阿修羅道）ではなく、阿修羅道を欠く五道で説くものがあるが、五道を説くのは部派仏教（いわゆる小乗仏教）、なかでも説一切有部系の影響が強いトカラ仏教の特徴でもある。ウイグル語仏典にはウイグル文字で書かれたもの以外にブラーフミー文字で書かれたもの（図13）もあるが、そのブラーフミー文字の形態的特徴は明らかにトカラ語表記用の文字の特徴を受け継いでいる。

表2

語　義	サンスクリット語	トカラ語	ウイグル語
瑜伽師	yogacāra	yogācāre	yogačari
夜　叉	yakṣa	yakṣe	yakši
阿修羅	asura	asure	asuri
波羅蜜	pāramitā	paramit	paramit
宝頂仏	ratnaśikhin	ratnaśikhi	ratnašiki
波羅塞	prasenajit	prasenači	prasänči

本来のサンスクリット語の語末音が，トカラ語に入るとその語の性格（有生物か無生物か）に応じて規則的に変化し，その変化がウイグル語形にも反映している。庄垣内正弘 "“古代ウイグル語”におけるインド来源借用語彙の導入経路について"『アジア・アフリカ言語文化研究』15, 1978, pp. 79–110 参照

図 13　ブラーフミー文字ウイグル語のアビダルマ論書

図 14　トゥルファン出土の契丹版『増壹阿含経』断片
欄外に「この増（壹）阿含を読んだ」というウイグル語の題記がある

ついで一〇世紀後半になると、漢人の仏教教団が、トカラ仏教教団を上回る規模でウイグル人への仏教改宗工作を進めていった。多数の漢文仏教経典がウイグルに翻訳され、ウイグル人仏教徒のなかにも漢文仏教を学習する者が増えていく（図14）。また、ウイグル仏典の中には、漢文原典を「訓読」して読み下したものも見つかっている。このように、ウイグル人のあいだに仏教が浸透した結果、一〇世紀末から一一世紀初頭には西ウイグル支配層のほとんどが仏教に改宗し、ウイグル＝マニ教は衰退に向かうこととなった。

図15　漢文・ウイグル文対訳の土地売買契約証文

漢字・漢語文化は、仏教以外の側面においても、遊牧ウイグル支配層に様々な影響を及ぼした。そもそもタリム盆地には、唐の西域支配時代に、漢文文書に基づく種々の統治制度や行政システムが導入されていた。ウイグルは唐に代わって当地を新たに支配するにあたり、これらの行政システムを継承した。[10] また、オアシス都市を支配する過程で、ウイグル支配層の中には都市民すなわち商業民・農耕民となるものもあらわれた。前掲の図12は、ソグド商人の世界にウイグル人が進出していったことを示す実例である。彼らは、ソグド人以外の漢人・トカラ人の商業民・農耕民とも、動産・不動産の売買、土地その他の賃貸借、金銭・穀物の消費貸借など、さまざまな経済的な交渉をもった。図15に示したのは、漢文・ウイグル文の双方で記された土地売買の契約証文である。漢文の方が大きな文字で書かれ、その行間にウイグル文の逐語訳が小字で挿入されていることからみて、この文書は、漢人が多数を占めるオアシス都市社会にウイグル人が進出するようになり、漢人から契約慣行や証文作成の技法を吸収し始めた時期のものとみなされる。のちのモンゴル帝国時代（一三～一四世紀）に至るまで、ウイグル文の契約文書類の書式や用語には、漢文契約文書の影響が色濃く表れている。[11]

こうしてウイグル人との接触・交流が深まる中で、血統的には漢人・トカラ人に属する人々も、やはりソグド人と

同様、支配者の言語であるウイグル語＝トルコ語を用いるようになり、タリム盆地＝中央アジアはトルコ語話者の世界「トルキスタン」へと変質していく。とはいえ、漢字やブラーフミー文字を使用する伝統が消滅したわけではなく、仏教と結びついた形で部分的に受け継がれて、後のモンゴル帝国時代に至ることとなる。また、いわゆるネストリウス派キリスト教に帰依するウイグル人も存在しており、彼らはウイグル字の他にシリア文字を用いて諸種の文献を残している。

五　ウイグル文字文化とモンゴル帝国時代の諸文化

ウイグル帝国が九世紀中葉に崩壊した後、三世紀以上にわたって権力の空白が続いていたモンゴル高原では、チンギス＝カンが諸遊牧集団を統一してモンゴル帝国をたてる（一二〇六）。その直前、チンギス＝カンは、ウイグル人タタトンガを通じて、ウイグル文字を使用する文書行政システムを導入していた。さらに一二〇九年に西ウイグル王国が国を挙げてモンゴル帝国に帰順すると、モンゴル帝国は多数のウイグル人を行政官僚やチンギス家の子弟の家庭教師として採用した。こうして一三世紀以降、モンゴル人のあいだではウイグル文字によるモンゴル語表記が普及する。モンゴル帝国第五代皇帝クビライは、チベット仏教の高僧パクパに命じ、チベット文字に基づいて新たにパクパ文字（いわゆるパスパ文字・八思巴文字）を創製させて公用字に制定する（一二六九年）が、ウイグル文字はその後も――モンゴル政権の内部ですら――使用され続け（図16）、一四世紀末にモンゴル帝国＝元朝が滅亡して以降にはウイグル文字が「モンゴル文字」と呼ばれるにいたる。ちなみに、中国の内蒙古自治区で現在でも使用されているモンゴル文字（縦書きモンゴル文字）もウイグル文字の末裔なのであり、一七世紀に清朝をたてた満洲人が作製した満洲文字も、もとはモンゴル文字を改良したものであるから、遡ればウイグル文字に由来する。

さてモンゴル高原統一の後、チンギス＝カンは東西に軍事活動を展開し、各地を支配下に組み込んでいく。こうしてモンゴル帝国に征服された地域でも、ウイグル文字モンゴル語の知識は行政官にとって必須となった。これを言い換えれば、被征服地域の出身者――漢人やイラン人――でも、ウイグル文字モンゴル語の知識があれば、実務官僚として出世していくことが可能だったのであり、その実例も少なくない。

当然ながら、中央アジアのウイグル人は、もとよりウイグル文字に通じており、またウイグル語＝トルコ語とモンゴル語の言語的親縁性からしても、モンゴルの政治機構に進出していくうえでまことに有利な立場にあった。彼らはモンゴル帝国の膨張と軌を一にして、その活動範囲を東西

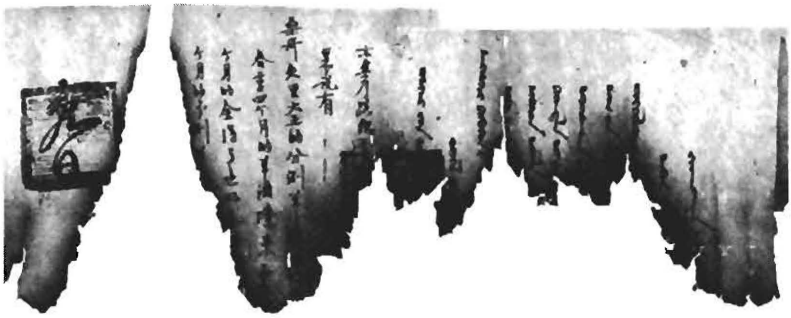

図 16　内蒙古自治区ハラホト遺跡出土モンゴル語・漢語合璧文書
ウイグル文字モンゴル語によるモンゴル王族の命令書（右半）にそれを翻訳した漢文文書（左半）が貼り継がれている。吉田順一・チメドドルジ（編）『ハラホト出土モンゴル語文書の研究』雄山閣，2008，No. 18 参照

に拡大していった。第五代皇帝クビライのもとに出仕したウイグル人イグミシュ（亦黒迷失）などは、僧迦剌国（スリランカ）や馬八兒国（マアバル）（南インド）にまで外交使節として派遣されているし、中国福建省の泉州には、中東から来往したイスラーム教徒や西欧からのカトリック宣教師の他に、中央アジアから移住したウイグル人キリスト教徒も集住していた（図17）。中央アナトリア地方で一四世紀に作製されたアラビア語寄進文書でも、アフマドというイスラーム教徒名をもつ将官が、寄進者として署名する際にアラビア

図 17　泉州のウイグル人キリスト教徒の墓誌銘
（シリア文字ウイグル語）

図18　アラビア文・ウイグル文合璧の寄進文書

西暦1326年に中央アナトリアの都市スィヴァスで作成されたもの。長さ2.7mに及ぶ長大な寄進文書の末尾部分で，寄進の立会人の署名にも，アラビア語以外にウイグル文字トルコ語を用いたものがある。D. J. Roxburgh, *Turks : A Journey of a Thousand Years*, London, 2005, p. 137参照

文字アラビア語ではなくウイグル字トルコ語を用いている例がある（図18）。さらにウイグル人たちは、帝国の支配層をなすモンゴル人に対しても、仏教やキリスト教などの宗教文化をもたらした。かつて、ソグド人やトカラ人がウイグル人に対して果たした文化的な役割を、今度はウイグル人がモンゴル人に対して果たすことになったのである。[12]

一方、モンゴル帝国の支配のもとでは、ユーラシア各地の諸文化圏から様々な人とモノが往来し、活発な文化交流・文化混淆が展開した。ウイグル人の本拠である中央アジア＝タリム盆地東半部でもこれは同様であった。例えば、前述したパクパ文字について、その字母を列記しさらにウイグル文字で発音を併記した一覧表が中央アジアで発見されている（図19）。ウイグル人が熱心にパクパ字を学習する様を彷彿とさせる。パクパ文字・ウイグル文字のモンゴル語印刷仏典も持ち込まれており、その読者にはモンゴル語話者＝モンゴル人だけでなくウイグル人も含まれていただろう。中国における印刷技術の発展は、ウイグル仏教に対してウイグル語仏典の大量出版という恩恵をもたらした。一三世紀後半になると、歴代モンゴル皇帝が特に重視・優遇したチベット仏教もウイグル人のあいだに影響を及ぼし、チベット語原典から翻訳され、中国で印刷された仏典が中央アジアにも流入するようになった（図20）。その他、中国からは民間信仰に由来する易書や暦占書も多数翻案・翻訳されている。一方で、西アジアや中央アジア西部のイス

ラーム教徒がモンゴル帝国支配下の中国地域に大量に来到・移住したことはよく知られているが、ウイグル語経済文書類を見る限り、ムハンマド・ラスール・ムバーラクといったイスラーム教徒名は全体からみてごく少数である。イスラーム的風水占いやアラブ・ペルシア文学に関する文献もわずかに現存するが、モンゴル帝国時代におけるタリム盆地東半部へのイスラーム文化の流入はまだまだ散発的・限定的なものだった。

図19　中央アジア出土パクパ文字表
パクパ字の左側に，それぞれの発音がウイグル字で表記される

おわりに

古代から一三・一四世紀に至るまで、本稿で述べてきたような多様な文字文化・言語文化の交流を生み出してきた中央アジア＝タリム盆地のオアシス地域も、一六世紀以降には完全にイスラーム文化一色に覆い尽くされてしまう。そして近代以降に清朝・中華民国・中華人民共和国政権のもとで大量の漢族が流入してきたことにより、現在では社

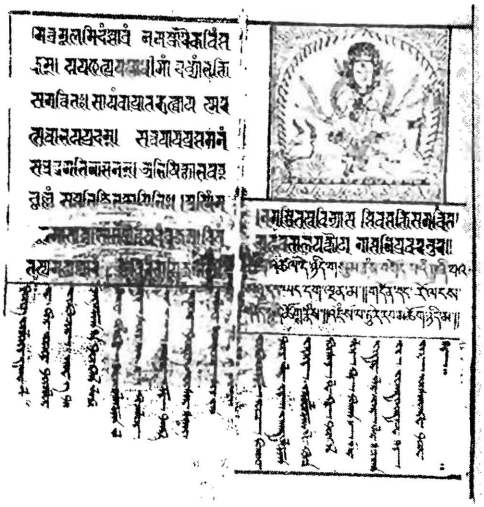

図20　チベット語原典から翻訳されたウイグル語訳『聖救度佛母二十一種礼賛経』
上半にサンスクリット語とチベット語原文が記される

会のあらゆる側面で漢字・漢語文化が優勢となっている。最近の新疆ウイグル自治区では、現代ウイグル語による高等教育が廃止され、一〇世紀以来、現地住民が使っていたトルコ系言語が消滅するという危機感に基づく民族主義的反発と、経済的な豊かさを求めてさらに漢字・漢語文化へ接近する動きが交錯している。

このどちらが正しい道かを判定する資格も能力も筆者には欠けている。しかしながら、歴史のなかで生起してきた諸文化の交流・対立のあり方を見直すことは、新疆だけでなく現代世界各地の諸文化の対立を解くヒントを提供することにつながるかもしれない。その意味で、古来「草原とオアシスの世界」に興亡した多くの文字文化・言語文化の歴史の再構成は、決して衒学趣味の対象ではなく、現代的意義を有しているといえるだろう。

注

(1) ル＝コック（木下龍也訳）『中央アジア秘宝発掘記』中公文庫、二〇〇二、二六頁。

(2) ニヤ遺跡出土のカローシュティー文字木簡を歴史学的に利用した研究としては、榎一雄「中央アジア・オアシス都市国家の性格」『榎一雄著作集・第1巻　中央アジア史I』汲古書院、一九九二年（初出：『岩波講座世界歴史・古代6』岩波書店、一九七一年）、長澤和俊『楼蘭王国史の研究』雄山閣出版、一九九六年。また、一九九〇年代に日中共同でニヤ遺跡の発掘調査が行なわれ、多数の新史料が将来されている。日中共同ニヤ遺跡調査隊『日中共同ニヤ遺跡学術調査報告書』第一巻～第三巻、一九九六～二〇〇七年。さらに近年、戦乱によりアフガニスタンから流出したカローシュティー文字仏典写本が収集され、仏教の中央アジア進出の最初期に属する資料として注目されている。松田和信「バーミヤン渓谷から現れた仏教写本の諸相」『古典学の再構築』七、二〇〇〇年。

(3) 以上、クチャ出土のブラーフミー文字文献に反映する当地の仏教文化の発展については、中谷英明「足寺足僧（サンスクリット写本から見る亀茲の仏教）」桑山正進（編）『慧超往五天竺国伝研究』京都大学人文科学研究所、一九九二、一八七～一九〇頁を参照。

(4) 大澤孝「新疆イリ河流域のソグド語銘文石人について」『国立民族学博物館研究報告』別冊二〇、一九九九年。なお、突厥時代に製作された石人に、ソグディアナの諸遺跡の壁画美術にみえる人物表現が採り入れられているものが多数あることも注目に値する。林俊雄「突厥の石人に見られるソグドの影響」『創価大学人文論集』五、一九九三年。

(5) 吉田豊「ソグド人とトルコ人の関係についてのソグド語資料2件」『西南アジア研究』六七、二〇〇七年、四九～五二頁。榮新江（西村陽子訳）「新出吐魯番文書に見える唐龍朔年間の哥邏祿部落破散問題」『内陸アジア言語の研究』二三、二〇〇八年。

(6) 護雅夫「突厥第二可汗国における『ナショナリズム』」『古代トルコ民族史研究』第二巻、山川出版社、一九九二

年、九八〜一三二頁。

(7) 護雅夫「第三章　イェニセイ銘文割記」『古代トルコ民族史研究』第二巻、山川出版社、一九九二年。

(8) 松井太「第三八回国際アジア・北アフリカ研究者会議報告・中央アジア関係」『東方学会報』九三、二〇〇八年、一六頁。

(9) 森安孝夫「トルコ仏教の源流と古トルコ語仏典の出現」『史学雑誌』九八—四、一九八九年を参照。

(10) この点については、松井太「モンゴル時代ウイグリスタン税役制度とその淵源」『東洋学報』七九—四、一九九八年、および Dai Matsui, Taxation Systems as Seen in the Uigur and Mongol Documents from Turfan: An Overview. *Transactions of the International Conference of Eastern Studies* 50, 2005 を参照。

(11) 護雅夫「ウイグル文消費貸借文書」『古代トルコ民族史研究』第三巻、山川出版社、一九九七年、森安孝夫「ウイグル文書割記（その一）」『内陸アジア言語の研究』四、一九八八年、および T. Moriyasu & P. Zieme, From Chinese to Uighur Documents.『内陸アジア言語の研究』一四、一九九九年を参照。

(12) モンゴル帝国の仏教受容について、一般にはチベット仏教の影響が強かったことは確実である。庄垣内正弘「『古代ウイグル語』におけるインド来源借用語彙の導入経路について」（表2参照）一〇六〜一〇七頁、松川節「モンゴル語訳『仏説北斗七星延命経』に残存するウイグル的要素」森安孝夫（編）『中央アジア出土文物論叢』朋友書店、二〇〇四年、八五〜九二頁を参照。

本講全体に関する参考文献

荒川正晴『オアシス国家とキャラヴァン交易』（世界史リブレット62）山川出版社、二〇〇三年

井ノ口泰淳「出土仏典の種々相」『シルクロードの宗教』（アジア仏教史・中国編V）佼成出版社、一九七五年、二〇五〜二〇六頁

NHK「文明の道」プロジェクト『海と陸のシルクロード』（文明の道3）NHK出版、二〇〇三年

小田壽典「古ウイグル文書にみる田園都市」板垣雄三・後藤明（編）『事典イスラームの都市性』亜紀書房、一九九二年、五一〜五二頁

『月刊言語』七—七（特集・シルクロードのことばと文化）、一九七八年

『世界文字辞典』（『言語学大辞典』別巻）三省堂、二〇〇一年

羽田亨『西域文明史概論・西域文化史』（東洋文庫、545）平凡社、一九九二年

松井太「パスパ字の制定——モンゴルの文字政策——」『月刊しにか』二〇〇一年一一号、三四〜三七頁

松川節『図説モンゴル歴史紀行』河出書房新社、一九九九年

護雅夫『古代遊牧帝国』中公新書、一九七六年

護雅夫・神田信夫（編）『北アジア史（新版）』（世界各国史12）山川出版社、一九八一年

森安孝夫「チベット文字で書かれたウィグル文仏教教理問答の

研究」『大阪大学文学部紀要』二五、一九八五年、一～八五頁
森安孝夫『シルクロードと唐帝国』（興亡の世界史5）講談社、二〇〇七年
森安孝夫・オチル（編）『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』中央ユーラシア学研究会、一九九九年
山田信夫『草原とオアシス』（ビジュアル版世界の歴史10）講談社、一九八五年
吉田豊「ソグド語資料から見たソグド人の活動」『中央ユーラシアの統合』（岩波講座世界歴史11）岩波書店、二二七～二四八頁